

△研究ノート▽

直江津線（信越線）敷設工事と飯綱町

―南一郎平（現業社）と請負業者らの記録―

小柳 義男

キーワード… 鉄道局、鉄道工事請負、直江津線（信越線）敷設工事、戸草隧道、穀類出入日計簿、現業社、児島組、三谷組、小川組、山崎組、南一郎平（南尚）、

本間英一郎、小川徳平、三谷長吉、山崎菊次郎

一 はじめに

いいづな歴史ふれあい館の『開館二〇周年記念特別展 信州赤塩焼』に「赤塩焼の歴史」〔1〕を執筆していた際、小山丈夫氏（いいづな歴史ふれあい館学芸員）から、赤塩窯で焼いた煉瓦を使用したと伝わる戸草トンネル（隧道）（写真1）は、現業社（南一郎平創立）が施工したと記された『日本鉄道請負業史 明治編』（以下、請負業史）を紹介いただいた。そのおりは、時間の余裕がなく執筆に反映させることができなかった。

その後、赤塩窯（煉瓦）と現業社の関係を知ろうと町内の資料を見返す中で、直江津線敷設にかかわった請負業者や現業社（南一郎平）について新たな知見を加える



写真1 戸草隧道（明治20年11月竣工）



図1 直江津線工事関係略図⁽⁴⁴⁾
1 普光寺 2 小玉 3 三谷

ことができたので報告したい。本稿が、当時事業に携わった官民の関係者の資料掘り起こしと、顕彰の契機になれば幸いである。

直江津線（信越線…現しなの鉄道北しなの線ほか）（図1）の鉄道敷設事業は、当地にとって維新後あるいは有史以来の一大事業であったにも関わらず、その実態は不明な点が多い。本論に入る前に、直江津線敷設工事の経過を簡単にまとめておく。

二 直江津線敷設の経過（各項文末丸数字は引用文献 注2参照）

- 1872（明治5）9・12 新橋・横浜間の鉄道開業式（②）
- 1874（明治7）5月 大阪・神戸間の鉄道開業（②）
- 1877（明治10）2月 京都・大阪間の鉄道開業（②）
- 1880（明治13）6月 京都・大津間の鉄道開業（日本人技術者のみで建設した最初の鉄道）（②）
- 1881（明治14）12月 日本鉄道会社設立。東京・高崎間及其の中央より青森に至る線路の敷設を第一計画とする（①）
- 1882（明治15）9・8 高田（上越市）の室考次郎ら、直江津・上田間の鉄道建設をめざす信越鉄道会社の発起者大会議を開催（③）
- 1883（明治16）8月 長野に信越鉄道会社の支社を設ける（③）
- 10・23 高崎―大垣間の中山道幹線建設が指令される（①）
- 1884（明治17）4・26 信越地方の有志者、上田から直江津を経て新潟に達する鉄道建設を目的に、信越鉄道会社の創立願いを新潟・長野両県令あてに提出（①）※出資者に倉井村の若林桂造（千円）（⑨）
- 5・18 工部卿上田―直江津間は官設にすべきと上申（①）
- 7・2 太政大臣、新潟・長野県令に中山道幹線から新潟に至る線路は官設と心得ることと指令（①）
- 9・12 上水内郡役所、戸長役場宛てに工部省技手国沢能長の郡内巡回（「鉄路線、為予測」）に便宜を図ることを通達（⑥）
- 10・16 井上鉄道局長、中山道幹線建設の資材輸送線として、上田・直江津間の建設を上申（①）
- 11月 信越鉄道会社発起人ら、再度新潟・長野両県令に上田・新潟間の中山道幹線との同時着工、もしくは鉄道会社設立許可請願（①）
- 1885（明治18）3・28 直江津・上田間の建設認可（①）
- 4月 工部省鉄道局一等技手国沢能長：直江津新町清水源吉方に宿泊

- し、砂山に事務所を設けて、測量を開始（④）
- 6・25 熊本丸（直江津港へ）新橋鉄道局より工事用レール八千本を廻送（④）
- 7月 直江津に鉄道局出張所置かれる。権大技長松本荘一（所長）が工事監督。一等技手国沢能長が直江津・関山間の工事担当（①）
- 8・11 熊本丸、鉄道にもちいる軌条二千本、汽罐車一台、鉄荷車（貨物車）一六台、瓦製伏管三千本、其他雜器械を搬送（④）
- 8・30 中頸城郡土橋村迄鉄軌敷設終了（④）
- 8月 一等技手国沢能長ら新井以南の測量に着手。関山・浅野間は山岳地帯を通過するため数回にわたる精密な測量。年度末にはおおむね測量が完了（①）
- 9・4 上水内郡役所「上田・直江津間鉄道、工事：順次当管下へ着手：順序ハ熊坂村返ヨリ、赤川ヲ経、野尻村・柏原村ノ間ニ有之候…」と通知（⑥）
- 10・15 高崎・横川間開業（①）
- 11・19 牟礼村清水民之助ほか「鉄道測量樹木伐採料金下附願」を牟礼村外十ヶ村戸長神谷巖あてに提出（⑦）
- 11・29 直江津・新井間を試運転（④）
- 12・10 この日を限りに新潟県内の工事（冬期間）は中止し、長野県内の工事に着手することになる（④）
- 1886（明治19）1月 関山・浅野間着工。本間英一郎が関川宿において担当（①）。
- 2・16 信州古間村鳥井（鳥居）川端にて鉄道普請始る（⑤）
- 2・28 関川村対岸の熊坂村にて鉄道普請始る（⑤）
- 3・1 小林作治郎ら鉄道局御用煉化石製造を請負。4月30日までに一万五千個を製造し検査を受けることなど盟約（⑨）

3・7 浅野から関川間の鉄道工事、作業員六千人で着手（柏原・大古間間）（⑩）

3・11 小林作治郎ら第一工場（赤塩村）と第二工場（倉井村）を設立し、本年8月30日までに煉瓦十五万個を第一工場、三十万個を第二工場において製造することなど盟約（⑨）

3・22 小玉村地主惣代川口啓作、戸草（鉄道局事務所）へ出頭（本稿）

3 大田切の築堤工事に着工（本間英一郎が監督）。鹿島組請負

4・5 牟礼村神谷戸長、鉄道敷地にかかる小玉・牟礼間の共同墓地移転申請を木梨長野県令あてに提出（⑦）

4・14 「信毎」路線は浅野村から長野町經由に決定したと報じる（③）

5・17 赤塩第一工場で最初の煉瓦四千個を窯出し（⑨）

6・11 川谷と小玉の作業員の喧嘩で死傷者が出る（⑧）

7・10 信州牟礼駅出張所長だった鉄道事務官南一郎平が現業社を創立し、浅野以南の工事を請負との報道（⑪）

7・11 鉄道工夫は浅野村より野尻村までの間に一万人もいる（⑩）

7 東西両京を結ぶ鉄道幹線、中山道から東海道に変更（①）

7 鉄道普請中山崩などにて各地に死傷者多し（⑤）

7・26 このころより、赤塩第一工場の煉瓦、戸草へ運ばれたか（「煉化出荷高當ザ扣」。一回あたり五十個（駄賃十銭）（⑨）

8・1 前日、県庁内に（コレラ）検疫本部を設けたとの報道（⑩）

8・10 倉井第二工場の休業が決定する（⑨）

8・11 牟礼・浅野村にコレラ病波及、郡役所は牟礼・浅野に検疫出張所・避病院を設置する（⑦）

8・15 直江津・関山間、開業（①）

10・24 現業社（浅野牟礼間の鉄道工事に従事）、コレラ病死者の施餓鬼を23日牟礼駅で挙行。千五百人余参加（⑩）

11月 このころ、吉田組工事作業員約千人を率いて浅野村に到着。

日当十五、六銭。弁当をもたない者には六、七銭と弁当を支給（③）

12 この年、赤塩第一工場で十万八千個余の煉瓦製造（⑨）

1887（明治20） 1・5 吉田寅松（吉田組）、浅野避病院への寄付により木杯下賜される（⑩）

20年はじめ 浅野・上田間 着工

2・4 雪中でも普請休まず毎日雪掘人足出る（⑤）

4 上田・軽井沢間 着工（①）

7 坂口新田隧道の竣工（②）

9 善光寺境内に工事犠牲者の「供養塔碑」が建立される（⑫）

11 戸草・大廻両隧道の竣工（②）

12・14 大田切の築堤工事完成し、列車が試運転（①）

1888（明治21） 1・4 関川に鉄橋架る。長四十間（⑤）

1・5 汽車柏原迄通る（⑤）

1・12 鉄道雪掘りの為毎日人夫出る。日当十五銭（⑤）

1・14 柏原から長野まで線路施工、牟礼―長野間で試運転（⑧⑩）

4・26 官報廣告欄に直江津・長野間の「鉄道列車時刻並賃金」が掲載される。一日二往復。牟礼・長野間上り36分、下り39分、中等29銭、下等15銭。「但牟禮停車場二限り當分開始セス」

4・27 「信毎」に掲載された「鐵道局」の直江津・長野間の「瀧車發着時刻及賃金廣告」には、（県内分は）柏原、豊野、長野の駅名のみ。牟礼駅は掲載されていない（⑩）

5・1 関山・長野間、開業（①）

8・15 長野・上田間、開業（①）

12・1 上田・軽井沢間、開業（①）

三 小玉村鉄道関連文書

小玉区（現飯綱町）には、明治19年からの鉄道敷設に関連した文書が所蔵されている⁽³⁾。当時の小玉村集落内を縦断するように鉄道が敷設されたため、現在の町域では最も大きな影響を受けた地域であった。このような事態に村がどのように対応したかを知ることができる貴重な文書群である。この中に、小玉村地主惣代の川口啓作と川口信三郎が明治19年・20年に記録した文書が三点含まれていた⁽⁴⁾。

地主惣代の業務は多岐にわたり、鉄道局・役場（牟礼村外十ヶ村役場）、地主との連絡調整、潰れ地や残地に係わる件、家屋や樹木の移転・墓地新設に係わる件、工事に伴う土置場・土捨場や用水のつけ替え新設に係わる件等の調査・報告書提出、県や鉄道局の係員の案内等が記されている。鉄道局は、旧来の村の組織をうまく利用（活用）し、工事を進捗させていたことが伺える内容である⁽⁵⁾。

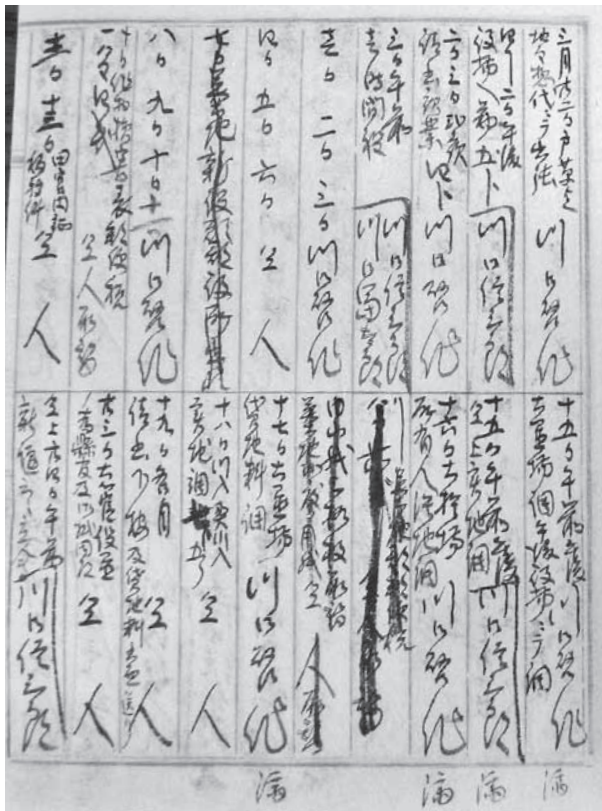


写真2 川口啓作日誌
(明治19年3月22日～4月24日)

川口啓作の明治19年の記録には、日々の業務内容やそれに要した時間、担当者名が簡潔に記されている。記録は、明治19年3月22日の「戸草迄地主惣代ニテ出張」から始まる（写真2）。戸草（現信濃町）近辺に鉄道局の事務所があったようである。

また、川口信三郎の記録には、「全十四日（明治19年4月）中杭外へ砂石ヲ出ス義ニ付三谷へ掛合」と記載されており、この段階で「三谷」なる者が、すでに小玉村近辺で工事を実施していることがわかる。この「三谷」については、明治19年10月16日付倉井村（現飯綱町）用水掛文書に、三谷長吉より破損した倉井用水の補償金（五円）を受領した文書が残されており⁽⁶⁾、請負業史に「土方の大親分」と記されている三谷長吉その人を指すものと思われる⁽⁷⁾。

このほか、牟礼鉄道局建築係宛の文書⁽⁸⁾もあり、当地に鉄道局の建設係を含む部署がおかれていたことも確認できる。

四 中島家文書に記された工事関係者

(一) 中島家文書の概要

飯綱町普光寺の中島家から、いづな歴史ふれあい館に寄贈された文書群の中に次に紹介する三点が含まれていた。中島家は「油屋」とも呼ばれ、普光寺村の庄屋（東・西の二組に庄屋が置かれた。中島家は西組）を数代勤めている。三点の文書を記録した中島小左衛門も庄屋を勤め、維新後は戸長等を歴任している⁽⁹⁾。

(二) 「驛通貯金取□」（以下 驛通貯金）

中央下部に「柏与版」と記された用紙を二つ折りにして綴る（全一〇三丁）。各頁は朱線（印刷）で区切られ十三行記述できるようになっている。帳簿には普光寺村を中心とする人たちの名が記され、月々の貯金額等と受領印が押された頁が続くが、終わりに近い部分に、鉄道工事請負人の名

がみえる。関係部分を翻刻紹介する。

明治廿壹年壹月從驛通貯金取□

一金拾錢 一月分 丸山□□□

一金拾錢 二月分

一金拾錢 三月分

(中略)

明治十九年八月十三日 鐵道工事請負人 児島組

一金三拾円 成重藤七殿

全年十月十六日

一金五拾円

全年十二月

一金拾円

明治二十年八月從九月迄

一金 (金額未記入・以下同じ)

児島組
鎌倉梅太郎殿
児島組
二本松金七殿
児島組

一金

児島組

一金

中村保治郎殿
(名前も未記入)

一金

山崎組
小松川鶴吉殿

鐵道請負

現業社

齊藤利貞殿

四月廿四日

一金 三陌円也 貸

但五月四日 本金受取

十一月十日

一金 貳陌円也 時借

但十一月十五日 本金相渡 御使大川君記入

十二月三十日

一金 貳陌円也 時借 小縣郡上田宿返町出張所

内 明治廿二年二月四日

金 百貳拾五円也 相渡 上田出張所

全年三月廿四日

金 七拾五円也 相渡 上田出張所

「鐵道工事請負人 児島組 成重藤七」、「鐵道請負 現業社 齊藤利貞」の記述から、児島組および現業社が直江津線敷設にかかわったことが推察された。

現業社については別項でもふれるが、南一郎平が創立した会社で、請負業史には、最初の仕事は直江津線の請負だと記されている。

(三) 「穀類出入日計簿」

「明治廿季第一月從至十月」(以下、日計簿1)と「明治廿年從十一月至」(二年六月四日まで記帳あり)(以下、日計簿2)と表題に記された二冊の「穀類出入日計簿」(以下、日計簿)がある。いずれも中島小左エ門名義である。ともに中央下部に「柏与版」と記された用紙(縦23・6^{センチ}、横14・5^{センチ})を二つ折りにして綴る。各頁は朱線(印刷)で区切られ一頁十行記述できるようにになっている。日計簿1は一九九丁あるが、後半三十九丁には「水車受納日計簿」等が記されている。日計簿2は一九三丁、穀類出入日計簿は前半五十丁分に記されている。

日計簿には「月日、摘要、事由、受、拂、残額」の項目があり、横線(墨)

写真3 日計簿1 (明治20年8月2・3日)

で区切っている。多くは一件一行で書かれているが、行を跨いで記述も見られる。

摘要欄には、上々白米、上白米、中白米、白米、ホソ白米、モチ白米など品種や精白の程度による等級分けが記される。ほとんどが米であるが、

大麦、小麦、黒大豆、大豆、蕎麦も記録されている。事由覧には、購入先や運搬場所、搬送者名(吾八・清蔵・仲二朗・董太など)が記されることもある。受・拂の覧には、購入量や売り渡し先への運搬量が記される。多くは壺石あるいは五斗を単位とする。残額欄への記載は見られない。

驛通貯金の資料から「鉄道工事請負人 児島組」「鉄道請負 現業社」の記録を見出したことから、もしかと思って日計簿を読んでいくと、事由に記された運搬場所の記録から、工事関係の組名や責任者と思われる人名等を知ることができた(写真3)。

日計簿は大部分なので、関係分のみまとめて紹介する(表1・2)。

○請負業者(組)及び組関係者

日計簿には、児島組成重藤七行、三谷組中森栄蔵行などと記されている。これから児島組、三谷組、小川組、山崎組の四組に穀類(ほとんど米)を販売していたことが確認できた(現業社の名なし)。宛先等として日計簿に記されていた会所や人物を列記する。

児島組 児島組会所、成重藤七、木田福太、加来松三郎、田中〇八郎、田中代細川、山本春治、鎌倉梅太郎、中村金七、藤本恵七、太田代吉、枡崎萬吉、七ヶ市八五郎、原永〇〇、石川伊助、中森高三郎、竹林与〇左衛門、井上宗五郎、松田元厚、川谷石工

三谷組 中森栄蔵、三谷竹治郎、三谷仲治郎、三谷永吉、林次平、〇吉、三谷喜助、三谷六右衛門

小川組 井上藤左衛門、坂(阪)口重造、吉川、太田信吉

山崎組 山崎會所、川谷山崎出張所 山崎菊次郎、衣の川、黒柳保之助、黒柳虎三郎、小松川五郎吉、宮本佐吉、黒川定右衛門

その他 鉄道局本間、小川徳平

日計簿にはまれに、「部屋」(鎌倉部屋、黒柳保之助部屋)の表記が見える。先に記した組関係者の多くは、それぞれの部屋の責任者(頭)ではな

表1 日計簿1集計(明治20年1月～10月)

組名・責任者	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
児島組 成重藤七 木田福太 児島会所 加来松三郎 田中□八郎 山本春治 鎌倉梅太郎 中村金七 藤本恵七 太田代吉 杵崎萬吉 七ヶ市八五郎 原永□□ 石川伊助 竹林与□左衛門 中森高三郎 児島組計	1 3 0.5	1	1 1 5	0.5 11	2 6.1 1.5 7 4.5 1 2 1	4 1.5 3 1 6.5 4.1 3.5 6.5 1.5 4	2.5 0.5 4 1.5 14 2.5 3.5 13 3 6 0.5 1 0.75 1	1.5 2 3 9 4 3 9 8.5 2.5	0.5 0.5 0.5 8.45 5.2 4 3.95	1 4 3.5 2.5 3 14
三谷組 中森米蔵 三谷竹治郎 三谷仲治郎 三谷永吉 林次平 □吉 太田信吉売帳 三谷喜助 三谷組計			5 6	7 14 1	3	2 9.5	2		1.5 0.5	2 1 2.5 1 6.5
小川組 井上藤左衛門 坂口重造 吉川 太田信吉 小川行 小川組計				6.5 5 12	2 13 1 16	1.5 7.5 9	7.5 1 7.5 4.15	3.15 1 4.7 5.3	0.6 4.7 3	0
山崎組 山崎菊次郎 山崎會所 衣の川 山崎出張所 山崎 本宅 黒柳保之助 山崎組計				5 1 6	22.5 1 5 28.5	16.5 6 8 30.5	3 20 6 8 37	6.5 5 1.5 5.5 3 22.5	5 1.5 3 15	1 1 1 3
月総計	4.5	1	18	51.5	72.6	86.6	100.25	70.15	48.9	23.5
その他 本間 小川徳平					1		1 20	3.5 40	10.5	2

米と大麦(全量本間行)のみ掲載。数字は石数

表2 日計簿2集計(明治20年11月～21年6月)

組名・責任者	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	組総計
児島組 鎌倉 中村金七 会所 井上宗五郎 松田元厚 石工 児島組川谷 児島組□□ 井上 児島組計	1.04 0.2 0.5 1.5					2 0.5 2 1	2.2 1 2	1 0.5 1.5	237.99 石
三谷組 三谷喜助 三谷六右衛門 三谷組計	2 2	3.5 3.5	2.5 2.5	1 1		2 2	1 1	0.5 0.5	70.5 石
山崎組 山崎菊次郎 黒柳虎三郎 黒柳保之助 高倉 山崎組計	2 5 7	6 6.4 12.4	3 3 6	5.5 2.5 9	1.5 1 2.5	3 8.6 11.6	2 2.5 4.7	0.2 0.2	195.9 石
小川組 月総計	0 12.24	0 15.9	0 8.5	0 10	0 2.5	0 19.1	0 10.9	0 2.2	53.95 石 558.34 石
その他 鉄道局 本間 小川徳平	1	1							大麦 9.5 石 70.5 石

かろうか⁽¹⁰⁾。

○穀類の搬送先

搬送先は、各組の会所や丁場（受け持ち現場）が多い。確認できたのは以下の箇所である。

児島組 児島組会所、児島丁場、川谷丁場、川谷

三谷組（人名のみ）

小川組 小川丁場

山崎組 山崎会所、小玉村山崎会所、川谷山崎出張所、旭町本宅、長野

新道山崎菊次郎本宅行

鉄道局本間行（関川住 霜取（鳥）左衛門）

小川徳平 阪口新田畑山桂蔵宅

川谷（現長野市豊野町）は普光寺から約5 km、本間のいた関川（新潟県妙高市）までは約15・5 km、長野市旭町約17・4 kmになる。

関川や長野市旭町まで実際に届けていることは「七月一日大麦 関川鉄道局本間行 清蔵 老石」、「全（九月十三日）ホソ上白 長野新道旭町本宅 山崎菊次郎 喜市 老石」というように搬送者名が記されていることから確認できる。

なお、小川への搬送米は西脇喜平（八月以降は西脇嘉平）から買い入れ、西脇が（一回ごと二・三日に分けて）坂口新田の畑山桂蔵宅（小川徳平宛）に届けていたようである。西脇喜平は「信越鐵道會社創立願」⁽¹¹⁾の出身人名簿に「千五百圓 全縣全郡（新潟縣中頸城郡）全村（小出雲村）西脇喜平」と記されている人物であろう。西脇嘉平も小出雲村の住人である⁽¹²⁾。小出雲村は現妙高市役所付近にあった。坂口新田村までは15 kmほどの地である。

○穀類の購入先 一万人もいう作業員（工夫ら）への食料供給は、沿線の小規模な村々⁽¹³⁾だけで賄うことは不可能であった。

中島家では、普光寺村周辺の個人や水車所有者（横川傳四郎、挽屋莊作、牟礼・小池仲治郎ら）、また柏原村（林屋）、古間村（十一屋）、富濃村（黒田氏ら）などの近隣の村々はもちろん、新潟方面からも大量に買い入れている。

新潟方面の購入先は「直江津太田買入 関川継柏原中牛馬入」、「直江津共同商店買入 関川新井儀一継」、「直江津共同商店買入 関川油屋継」、「直江津丸山伍太郎買入 信濃屋継」、「直江津市川支店買入 信濃屋継」、「西脇嘉平出 関川信濃屋継」、「西脇嘉平出 柏原村中牛馬継」、「西脇嘉平出 牟礼町田彦三郎継」、「小出雲村入村幸造買入 信濃屋継」、「関川駅信濃屋買入 柏原駅継小玉村山崎會所行」など多岐にわたる⁽¹⁴⁾。

ことに西脇嘉平との取引は多く、日計簿には取引ごとに（一回一石が大半）通番が記され、三百八拾四（20年10月5日）まで確認できる。

こうした記述から、県内外の穀物販売業者と協力して米を中心とする食料供給にあたっていたことが分かる。また、遠方からの運搬は中牛馬会社などを経由して購入していたこともわかる。

○搬送量（販売量）

搬送量（販売量）を総計すると、558石3斗4升（ほかに児島組内に小麦5斗、黒大豆2斗3升）にのぼる。一石150 kgとして計算すると、8万3千750 kgほどになる。このほかに関川（現妙高市）の本間英一郎に大麦を9石5斗（10回）、坂口新田（現妙高市）の小川徳平に70石5斗（7回）販売している。

搬送量を月別にみると、20年1月4石5斗（6回）、2月1石（1回）、3月18石（20回）、4月51石5斗（53回）、5月72石6斗（78回）、6月86石6斗（108回）、7月100石2斗5升（135回）、8月70石1斗5升（110回）、9月48石9斗（78回）、10月23石5斗（38回）、11月12石2斗4升（18回）、12月15石9斗（21回）、21年1月8石5斗（11回）、2

月10石（13回）3月2石5斗（4回）、4月19石1斗（24回）、5月10石9斗（14回）6月2石2斗（4回）となる。

飯に一人一日一升¹⁵を消費したとすると、最盛期の七月（31日間）で一日平均323人分ほどである。一万人もいう周辺の作業員への食糧供給には、多くの穀物販売業者がかかわったことだろう。

日計簿から見る限り、搬送量のピークは7月で前後の5・6月、8月の四か月間で59%ほどになる。21年1月14日には、牟礼―長野間で試運転が開始されているので、この間に主力はしだいに転出し、以降は21年5月1日の関山―長野間開通（営業開始）に向けた線路周辺の環境整備にあたったのではなからうか。

次に、組ごとの搬送量をまとめておく。

児島組 20年1月から記載されているのは、児島組だけである。総量が238石ほどになり、四つの組の中で最大である。

月別で見ると搬送量の最も多いのは20年7月で53石余、前後の5・6、8・9月をあわせると184石余になり、総量の80%がこの5か月に集中する。また、冬季間休業していたと思われる20年12月から21年3月を除き、21年6月まで児島組の名が見えている。

児島組では山本春治（48・95石）、藤本恵七（34・45石）加来松三郎（31・6石、ほかに黒豆1斗）の三者で児島組全体の48%を占める。

三谷組 20年3月から記載されている。総量70石余。月別では20年4月が最大で22石である。6月までに67%余が集中するが、少量ながらも21年6月まで引き続いて搬送されている。

三谷組では三谷竹治郎（20石）と、中森栄蔵（17石）宛ての搬送量が多く、両者で総量の半数を上回る。特に3・4月は両者の合計で32石になる。三谷組の作業はこの時期に重点が置かれたのだろう。

小川組 20年4月から同年9月まで記載される。掲載期間は6か月だけで

四組の中で最も短い。総量54石ほどである。月別では20年5月が16石で最も多い。前後の4・6月をあわせると37石になり、総量の70%近くになる。小川組では坂口重造（19・5石）、吉川某（18・75石）宛の搬送量が多い。両者で70%を上回る。坂口は4・5月で18石、吉川は6月から記載されており6・7月で15石となる。4・5月は井上と坂口、6月以降は吉川・太田が中心で作業にあたったようである。仕事内容が異なったのかもしれない。

山崎組 20年4月から記載される。全量196石ほどで児島組に次いで多い。月別では20年7月が37石で最も多い。前後の5・6・8月をあわせると120石近くになり、総量の60%ほどとなる。

山崎組では、山崎菊次郎（53・5石）、山崎会所（50石）、山崎出張所（34・5石）への搬送量が多い。代表者の山崎菊次郎や会所（出張所）あての搬送が多いのが山崎組の特徴である。

五 請負業者及び関係者について

日計簿に記載された関係者について若干補足しておく。

児島組 注16文献には「（児島組は）南が大分の広瀬井手（用水）を完成させるための片腕として、水路橋の建築に手腕を發揮した人たちである。…安積においては、疎水工事の最も重要な部分である十六橋水門の架橋や…を完成させている」と記されている。児島組は南一郎平が地元大分の広瀬井手工事に取り組んで以来の仲であり、安積疎水や那須疎水の工事をもにしてきた¹⁶。直江津線工事でも南と行を共にしたのであろう。

日計簿には20年1月から確認できるだけであるが、驛通貯金（成重藤七）の記述から、すでに明治19年8月13日以前に工事に参加していたことが推測される。

成重藤七 驛通貯金に、請負業社の関係者として筆頭に記された人物で、

児島組でもそれなりの地位にあったと思われるが、20年1月に5斗ずつ2回搬送されているのみである。以後の動向はつかめない。前年8月段階で存在が確認されているので、彼の担当する仕事に区切りがついたのではなかろうか。

鎌倉梅太郎 同じく驛通貯金に名がみえる。20年5月から11月まで総量24・84石。児島組内で四番目の量が搬送されている（このほか、小麦5斗、黒豆1斗）。12月以降の冬季休業期間をはさんで、以後の動向は不明である。

驛通貯金に記された二本松金七、中村保治郎については日計簿に名が記されていない。離れたところに現場があったか、あるいは他の業者から仕入れていたのだろうか。二本松や中村の例でもわかるように、日計簿に記されていない関係者が各組にいたと思われる。

三谷組 三谷組は、三谷長吉を長とする土木業者である。以前から南一郎平と一緒に仕事をしており、南が安積疎水で補佐役として完成させた工事には「大土方 東京 三谷長吉」として参加している。また、南が責任者としてのぞんだ那須疎水の工事では「東京の土木業者である三谷長吉」も請負人の一人だった⁽¹⁷⁾。

請負業史には、「現業社が箱根隧道を引受くるに及び、その下請人中に往年の黒鯢の親分、三谷長吉及今村浅次郎等の新鋭が新たに加わり」と記している⁽¹⁸⁾が、直江津線工事の段階から現業社の下請けをしていた可能性もある。

三谷長吉の名は日計簿には記載されていないが、明治19年10月16日付の倉井村用水掛文書⁽¹⁹⁾にその名が見えるので、自ら工事の指揮を執っていた時期があったように思われる。三谷竹次郎は三谷長吉の弟との証言がある⁽²⁰⁾。

日計簿に挟まれていた三谷喜助の中島小左衛門宛手紙(21年12月5日付)には、赤塩方面で工事中であることを記している⁽²¹⁾。この時期、牟礼駅

から飯山に向かう県道の改修工事が、牟礼村外十か村役場と芋川村外四か村役場によって実施されている(工費三千円余)。飯山方面からの牟礼駅への集客を期待した工事であった⁽²²⁾。

三谷組として請け負った工事が、三谷喜助名で請け負った工事がまでは確認できないが、鉄道敷設工事にあたっていた三谷組の一員が、鉄道工を終了後このような工事にも参画していたのは興味深い。

小川組 小川組についての資料は乏しい。後述する小川徳平の率いた組かとも思われるが、小川徳平は坂口新田で指揮をしていたようであり断定できない。ただ、徳平への米の搬入が終わる時期と小川組の転出が同時期であることは注意したい。

山崎組 山崎組についての資料も乏しいが、日計簿には、「長野旭町本宅山崎菊次郎」と記されており、長野市旭町に住宅(事務所)のあった山崎菊次郎が率いた業者だったようである。また、小玉村山崎會所、川谷山崎出張所とも記されており、小玉と川谷周辺で工事を請けもっていたことが伺える。

山崎菊次郎は、かつて善光寺境内に建立された「供養塔碑」(明治20年9月)の首唱者(三名)の一人でもある⁽²³⁾。また後述する小川徳平の「紀年碑」にも、発起人(四名)の一人として名が刻まれている。

驛通貯金に「山崎組小松川鶴吉」と記されている小松川は、日計簿には記載されていないが、「供養塔碑」に世話人(十一名)の筆頭として名が刻まれている。なお、同碑には、衣川弥三郎(「衣の川」か)、黒柳虎三郎が世話人として、黒川定右衛門が小頭(三七名)の一人としてその名を刻まれている。

鉄道局本間は、本間英一郎をさす。安政元年(一八五四)一月生。旧福岡藩士。慶応三年(一八六七)から明治七年(一八七四)までマサチューセッツ工科大学へ留学し土木を学ぶ。一八八〇年鉄道局に入って、長浜―

敦賀間の鉄道工事に加わる。一八八六年一月直江津線の工事が関山・浅野間におよぶとその工事を担当（関川に事務所）。大田切拱渠・築堤建設等の難工事を指揮した⁽²⁴⁾。

赤塩窯での煉瓦の製造が遅いと怒って「答（むち）を片手に白馬に乗った本間なる人物が到着」したと、小林義治が祖母から聞いた話として記述した「本間なる人物」は、この本間英一郎であろう⁽²⁵⁾。

小川徳平は、坂口新田村（現妙高市）の畑山桂蔵宅に事務所を置いていたようであるが、詳しい現地の状況は不明である。

徳平も以前から南一郎平の指揮下で一緒に仕事をしており、安積疎水工事にも「大隧師 大分 小川徳平」として参加している。

請負業史には、「其（現業社）下請には、小川徳平、加来儀兵衛、児島佐左衛門等あり就中、小川、加来は当時「穴掘りの名人」と謳われ：南一郎平が往年豊後の広瀬堰工事を施工せし時以来の股肱である」と記されている⁽²⁶⁾。

坂口新田では長さ67・1mの隧道工事が行われていた⁽²⁷⁾。現業社は、坂口新田・戸草・大廻の隧道工事を請負ったとの請負業史の記述もあり⁽²⁸⁾、徳平は坂口新田村の畑山桂蔵宅に居をかまえて、現業社が請負った坂口新田隧道の工事にあたっていたものと思われる。

坂口新田の隧道は20年7月に竣工している⁽²⁹⁾が、徳平への米の搬送が7・9月の三か月間で70・5石に達している。7月の竣工後も仕上げに時間がかかったのか、あるいは11月に竣工している戸草と大廻の隧道工事にかかわっていたのであろうか。

今回の調査の中で、小川徳平の墓が戸草（現信濃町）に存在することを、同地の山森光夫氏にご教示いただいた。これまで知られていなかったのがこの機会に紹介したい。徳平の墓は、戸草の桜井功家の墓と並んで建っている（写真4）。墓碑には

明治廿七年二月廿三日

光忍院積善智徳居士

熊本縣下益城郡小川町

小川徳平

と刻まれている。熊本県下益城郡小川町は、現在の宇城市小川町にあたる。また、桜井家の過去帳には「歿年月日・戒名略）熊本縣下益城郡小川町百四十五番地金子徳平「戸草櫻井瀧三郎方ニテ死ス」とあり元は金子を姓としていたようである。

同家には「家に泊まっていたことや「監督さん」と呼んでいたこと、「物置の基礎をコンクリートで作ってくれた」などと伝えられている。

さらに、調査を進める中で、小川徳平の碑が善光寺の本堂裏にあることが判明した⁽³⁰⁾。すでに『善光寺之碑文集』（小林一九七七）に紹介されているが、小川徳平の業績を知ることのできるよい資料であるので、省略された世話人部分の紹介等を兼ねて、全文を掲載する。

（碑正面） 小川 徳平 翁 紀 念 碑

（碑裏面） 翁肥後小川町之人専従事土木嘉永元始業爾来四十餘



写真4 小川徳平の墓（右側）

年手不絶工就中如二豊黒野廣瀬高森三大渠及猪苗代
湖開鑿天龍川疎通其著名者晚從事鉄道現工中病没于
信州富士里村實明治廿六年十二月也享年六十六翁質
性篤實最長隧道佗皆執範于翁推至稱近世隧道工之祖
而自餘大小成績不遑枚舉矣夫一人之作工如此者佗多
不見其比況於灌漑之利開通之便乎故每工多者三百金
以下十餘回有官私恩賚如翁謂盡人事蓋非過言也因同
志相謀勒之碑陰以充紀念云 明治卅一南尚撰文並書
(向かつて右側面)

明治三十一年二月建之 世 愛知縣三河國渥美郡下細谷村

話 前 田 桂 治 郎

人 大分縣豊後國西國東郡

徳 永 永 七

(向かつて左側面…四段表記、三・四段は※に続く)

發 秋田縣陸中國鹿角郡柴平村 長野縣信濃國長野市旭町

起 今 村 淺 治 郎 山 崎 菊 治 郎

人 神奈川縣相模國足柄下郡 大分縣豊後國西國東郡

皆 川 萬 吉 徳 本 今 吉 ※

※ 世 大分縣豊後國速見郡 長野縣信濃國長野市旭町

安 部 磯 吉 衣 川 信

話 大分縣豊後國西國東郡 静岡縣伊豆國

徳 本 貞 吉 皆 川 新 吉

人 秋田縣陸中國鹿角郡柴平村 長野市岩石町

今 村 直 治 郎 石 工 中 村 莊 助

碑の「撰文並書」は南尚による。南尚は南一郎平が後年(明治32年12月)

改名した名である⁽³¹⁾。徳平が嘉永元年から土木業に従事したことや、彼の携わった工事(二豊、黒野、廣瀬・高森の三大渠)、「近世隧道工之祖」と称されていたこと、工事中⁽³²⁾に病没したことなどを詳しく記している。徳平と南の親しかった様子が伺える。

発起人四名のうち今村、皆川、山崎の三名と世話人の今村直治郎は「供養塔碑」にも名が刻まれている。今村浅治郎(浅次郎)と徳永今吉は、請負業史にも名がみえている⁽³³⁾。

どのような経緯か、記された没年(明治26年12月)は墓石(明治27年2月23日)と相違している。

このほか、浅野(現長野市豊野町)付近で吉田組(吉田寅松)が工事を請負っていたことが確認されている⁽³⁴⁾。

工事を監督した鉄道局の職員については『柏原町区誌』に、「当時直江津の現地に駐在されたお役人方」として権大技師松本莊一郎以下21名の「直江津鉄道局官吏」が記載されている。出典が不明であるが「直江津鉄道局」の組織に触れた貴重な資料である⁽³⁵⁾。

地元から工事に参加した者の記録も乏しいが、昭和30年の三水村公民館報⁽³⁶⁾に、当時九十四歳の羽入田善之助(文久二年(1862)七月生)が、「汽車の開通の時は鉄道の附設にも行った」と語っているのを紹介している。羽入田の住む若宮(現飯綱町芋川)は、牟礼駅まで5kmほどある。近隣からも数多くの人が参加したことであろう。

六 南一郎平の現業社創立と飯綱町

日計簿には記されていないが、請負業史に「(南は)井上(鉄道)局長の配慮により早速直江津線の仕事を与えられ、斉藤利定が代人として之に当たった」と記されていたことや、中島家の驛通貯金の記録に、「鉄道請負 現業社 齊藤利貞」⁽³⁷⁾とあったことから、現業社も当地の鉄道敷設に

かかっていることが推測された。

現業社は、三大疎水（安積・那須・琵琶湖）の恩人とも伝えられる南一郎平⁽³⁸⁾が創立した会社である。南の疎水工事についての業績は多くの書籍等でふれられており、本稿では略させていただく。

現業社創立に至る経過を調べる中で、当地も大きくかわっていたことが確認できたので紹介したい。

内務省土木局第一部長であつた南が鐵道局に移動。明治十九年二月の『官員録』から、鐵道局事務官（事務館長井上勝を含め八名）の末尾に「大分 正七位南一郎平 駒込東片町 拾番地」と記される⁽³⁹⁾。

明治19年4月24日の朝日新聞朝刊「公報」（官報）に、4月19日付で「叙奉任官四等賜上級俸 鐵道事務官正七位 南一郎平」と記されてまもなく、明治19年6月8日の讀賣新聞朝刊に、社長南一郎平、理事大橋靖の名で「今般其筋の賛成を得同志者數名職を退き宿志の現業社を創立せり付てハ鐵道の受負を主とし」といった内容の「現業社創立廣告」が掲載される⁽⁴⁰⁾。現業社の創立はこのころであつた。

これより先、同年6月5日の朝日新聞（大阪朝刊）に掲載された公報（官報）には、6月1日付けで「鐵道事務官南一郎平 非職を命ず」と記されている。非職は現在の休職に近い扱いであるが、官職身分のまま「本属長ノ許可ヲ得テ地方病院学校及農工商陸海運輸等会社ノ業務ニ従事シ其役員ト為ルコトヲ得」とされている⁽⁴¹⁾。非職となつた南は、すぐさま現業社を創立したのである⁽⁴²⁾。

また、同年7月14日の新潟日報（朝刊2面）は、「○鐵道工事の請負 今度政府ハ直江津鐵道工事を民間の事業家に請負はしめる々ことに内決されし趣にて向に信州牟禮驛出張所長たりし南一郎平氏技手及び建築掛等十二名と共に辭職して現行社と稱する土木請負の會社を組織されしも矢張右工事を請負ふ目的に出てしものならんと云ふされは

○現業社創立廣告

今般其筋の賛成を得同志者數名職を退き宿志の現業社を創立せり付てハ鐵道の受負を主とし、
水利土工に從事し其現場施設監督の勞に代り一成業の責に任じ、
官民華主の便益と計らんとし因てハ工事の大小と問
んことを企望仕候也
但規則ハ郵券二錢送附あれば送呈と
東京本郷區駒込 社長 南一郎平
西片町十番地
東京下谷區仲徒町 理事 大橋 靖
四丁目三十五番地

資料1 現業社創立廣告

既に信州浅野以南の工事ハ其筋より請負を命令されしとの説もあり（下略）」と報じている。

南が牟礼驛出張所長であつた等の報道を裏付ける資料を持たないが、事実とすれば、現業社の創立以前から（児島組や三谷組とともに）牟礼周辺の工事にかかわっており、その縁で現業社の初仕事が生江津線工事になつたのであろう。

その後、報道の通り現業社が当地近辺で工事を実施していたことは、信濃毎日新聞の明治19年10月24日の記事で確認できる（ルビ省略）。

「○虎列刺施餓鬼 浅野牟禮間の鐵道公事に従事せる現業社の社員一同が虎列刺病にて死せしもの、為めに昨日大施餓鬼を行ひたり其模様を聞くに同行員一同人足に至るまでを合し千五百人餘か休業をなして牟禮驛に於て數名の僧を延き祭事を執行したるは中、に盛なりし由」

現業社は、浅野・牟礼間で鐵道工事に従事しており、明治19年10月23日、

総勢千五百余人が牟礼においてコレラで亡くなった従業員のため施餓鬼を実施したことを記している。千五百余人は下請の人員を含めた数であろうが、初仕事としては大きな仕事を請負っていたようである。

12月の官員録に「○鐵道局 鐵道事務官 同級俸（四等上級俸）」

大分 正七位 南一郎平 東片町拾番地」と記されたのを最後に、翌20年1月の官員録から南の名が消える。属の一員として掲載されていた大橋靖（現業社理事）の名も記されていない。

南の現業社は、直江津線工事で大きな成功を収めたようで、請負人業史は、「現業社は直江津線の工事に成功し、一躍会社の基礎を固め、業界の第一流に伍するに至った」と記す⁽⁴³⁾。

明治21年12月20日、南は広瀬・高森堰の開削の功により藍綬褒章を授与された。現業社を創立し鐵道局を去った南であるが、同年12月26日付の官報第一六四九号は、「褒章下賜 去ル二十日賞勲局ニ於テ褒章ヲ下賜セシ者左ノ如シ 非職鐵道事務官正七位 南一郎平」と記しており、依然として非職の身分を保持していた。

以上断片的であるが、牟礼出張所長であった南が非職となつて現業社を創立したことや、初仕事となつた牟礼周辺の鐵道工事に千五百人余の規模で取り組んでいたことなど当地とのかかわりを確認できた。

日計簿で確認した四組と現業社の関係であるが、これまで触れてきた南と児島組・三谷組の関係を考えれば、現業社の創立後、両組は現業社の下請に加わつたものとおもわれる。小川組も小川徳平の組織した組であつたなら同様であろう。山崎組との関係は、はつきりしない。小川徳平を介して関係があつたのだろうか。

七 まとめ

- ・日計簿等から飯綱町周辺の鐵道敷設工事に、現業社、児島組、三谷組、小川組、山崎組が携わつていたことが確認できた。あわせて、穀類を受領した四組の「頭」クラスの人名も知ることができた。

また、鐵道局の役人であつた本間英一郎や「穴掘り名人」として知られていた小川徳平へも遠路供給の便をはかつていた。

- ・三谷長吉や吉田寅松らも含め、鐵道請負業史に名を遺すそうそうたるメンバーが、当地および付近の直江津線敷設工事に参加していた。

- ・工事の忙しかった時期や業者の入れ替わり、各組内の人員の入れ替わりなどが消費量の変化を通して伺えそうである。作業内容に応じて人員を動員しているのだろう。

- ・四組への搬送量が最大であつた20年7月の石数（100石余）から試算してみると、一日平均320人分ほどの量である。周辺の工事関係者への供給には、数多くの穀物業者が対応していたのだろう。

- ・鐵道敷設事業という特需に際し、県内外の穀物業者や運送業者が協力して供給にあたっていた。

- ・穀類の売上金をどのように清算したのかは不明であるが、小川徳平賣帳（8月26日）、太田信吉賣帳（10月8日）といった記述もあり、部屋別に帳面が作成され、清算されていた様子が伺える。

- ・小川徳平の墓を戸草で確認した。墓碑銘や過去帳から本籍地・歿年月日等知ることができた。あわせて善光寺境内の小川徳平翁祈念碑の存在を再確認し、小川の業績や南尚らとのかかわりを知ることができた。

- ・「三大疎水の恩人」として知られる南一郎平は、鐵道局の牟礼出張所長を務めていた。官職身分のまま非職となり現業社を創立したこと、初仕事直江津線工事であり、現業社は千五百余人を抱えて工事に従事していたことなどを知ることができた。

謝辞

小玉区有文書・中島家文書等、地元に大事に保存されてきた文書なくして本稿の執筆は不可能でした。まずもって感謝申し上げます。

左記の皆様にもご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

(敬称略・順不同) いづな歴史ふれあい館、公益法人高速道路調査会、小玉区、善光寺事務局、小山丈夫、桜井功、高野清、中島栄知・和子、広田俊博、山森光夫

注

1 小柳義男二〇一九「赤塩焼の歴史」『信州赤塩焼―北信濃に残る陶工の技―』いづな歴史ふれあい館

2 直江津線敷設の経過・年表作成引用文献

① 日本国有鉄道一九九七「高崎・直江津間の建設」『復刻版 日本国有鉄道百年史第2巻』

② 鉄道建設業協会一九六七『日本鉄道請負業史 明治編』

③ 横山憲長一九九七「信越鉄道の建設工事」『長野市誌 第五巻歴史編 近代一』323～326頁

④ 新井市史編纂委員会一九七一「鉄道開業」『新井市史 下巻』

⑤ 名香山村史編纂委員会一九五六『名香山村史』

⑥ 柏原町区誌編纂委員会一九八八『柏原町区誌』

⑦ 伊藤 勉一九九七「信越線牟礼駅開業」『牟礼村誌下 近代・現代』牟礼村誌・学校誌編纂委員会

⑧ 豊野町誌刊行委員会一九九五『豊野町の年表 豊野町誌4』

⑨ 注1文献に同じ

⑩ 信濃毎日新聞掲載記事による

⑪ 新潟日報掲載記事による

⑫ 降旗利治二〇一七「信州の鉄道碑ものがたり」信濃毎日新聞社

小西純一 一九九六「信越本線沿線の鉄道碑をめぐって」『鉄道ピクトリアル』No.629

3 小玉区誌編纂委員会二〇〇六『小玉区誌』

同書資料編「小玉区の古文書」には、明治十九年（鉄道関係鉄道掛入費課賦調 三冊）ほかから、明治二十・二十二年の「官有地成除租調帳（鉄道敷地トシテ御買上調帳）」まで十件ほど掲載。

4 同様の交渉日記（更級郡今里村更級弘雄）が長野県史に掲載されている。『長野県史 近代資料編 第七巻交通・通信』550～554頁

5 小柳義男二〇二三「直江津線（信越鉄道）敷設時の記録から」飯綱郷土史研究会令和5年総会講演要旨

小柳義男二〇二三「小玉村鉄道関係文書（1）」『いづな』111号
飯綱郷土史研究会

小柳義男二〇二三「小玉村鉄道日誌（2）」『いづな』112号

6 小柳義男二〇二四「古文書解説案 倉井村用水掛文書・三谷喜助の手紙」『いづな』114号

7 注2②文献77頁 「三谷一家の開祖で土方の大親分で、三谷長吉は杉井組第一の宿老」

8 明治十九年「土置場貸地料御下付願」、および明治十九年～二十年の「鉄道敷地作物時付料」の表題の2件が牟礼鉄道局建築係宛である。

9 三水村誌編纂委員会 一九八〇『三水村誌』

10 請負業史には（藤田組では）多数の工夫等を組織的に働かせる為に、三十人乃至五十人を一組に為し（中略）、各組に一人の旗頭を置いて統率させ、一人の総監督が是等三十人の旗頭等を統率した（注2②文献22頁）と記している。穀類の運搬先は、「旗頭」に相当する人物が主であると思われる。

- 11 日本国有鉄道一九七七『工部省記録鉄道之部』（第七冊）791頁
- 12 『小出雲今昔』（大字小出雲協議委員会ほか二〇〇六）の「上越銀行発起人地価所有調」に、西脇嘉平は明治30年の地価所有額一、〇八四円八銭と記載されている。前出の西脇喜平の縁者か。
- 渡辺慶一「鉄道信越線のあけぼの」には、明治15年11月西脇嘉平が信越鉄道会社の株主募集委員に委嘱されたことが記されている。
- 13 『長野縣町村誌』より現信濃町、飯綱町、長野市豊野町域の村々の人口を集計すると、二万二千余人である（概ね明治14年前後の記録）。
明治文献一九七三『長野縣町村誌 北信編』
- 14 買入れ先の調査は行き届いていない。「小出雲村入村幸造」は、注12文献に西脇嘉平らと共に「入村幸蔵」として掲載されている。
- 15 請負業史（注2②文献72頁）には、「その頃の人夫は一日五回食事を摂り、夜業があれば更に一回：一人一日米一升では足りなかった」と記されており、控えめな数字かもしれない。
- 16 那須塩原市那須野が原博物館二〇〇九『近代を潤す 三大疎水と国家プロジェクト』
- 17 注16に同じ。前後するが、同書には児島組の石工に木田福太郎（大分県東国東郡）の名がみえる。児島組の木田福太と同一人物だろうか。
- 18 注2②文献 91頁
- 19 注6文献参照
- 20 田代修也は、那須疎水工事に従事した箕輪村（現那須塩原市）の住民の証言として「疎水の工事請負人は、三谷長吉といって60余才、東京下谷区（現台東区の西部）の土木業者で、実際の現場監督は、その弟の三谷竹次郎であった」と記している。
- 田代修也二〇一九「旧西那須野（那須西原）の緑と水（第74回）」『NETWORK NASU 6月月報』那須ワイズメンズクラブ
- 21 注6文献参照
- 22 注9文献参照 1253頁
- 23 坂城町誌には、山崎菊治郎（菊次郎）が明治9年9月から現坂城町の横吹新道の築造工事にあたったことが記されている。
坂城町誌刊行会一九八一「横吹新道の築造」『坂城町誌下巻』
明治11年11月発行の「長野管下開明長野町新図」には、「修繕方 山崎菊治郎」と記載されている。
- 長野商工会議所一九六八『仏都百年の歩み』長野商工会議所69頁
「供養塔碑」は、「鉄道建設犠牲者供養塔」（小林一九七七）、「信越線工事犠牲者供養塔」（降旗二〇一七）、と表記されることもあるが同一の碑である。小西一九九六は「供養塔碑」としている。小林、降旗は碑文の内容を考慮して命名したと思われるが、篆額に「供養塔碑」と記されているので、供養塔碑と表記する。
- この碑は、のち移転を繰り返し現在、中御所跨線橋（人道橋）の西側階段下にあるという（降旗二〇一七）。
- 小林 済一九七七『善光寺之碑文集』
小西一九九六、降旗二〇一七は、注2②文献に同じ
碑文は小林、小西の報文に記されているが、世話人（13名）、小頭（37名）および犠牲者と思われる37名の住所や氏名は省略されている。今回の調査で、小山丈夫氏から提供いただいた写真から、それらを確認したが紙面の都合で割愛した。
- 24 A注2①文献に同じ
B 鉄道史学会二〇一三「本間英一郎」『鉄道史人物事典』日本経済評論社
- 25 小林義治二〇〇一「トンネルの煉瓦」『十五周年記念誌』飯綱郷土史研究会

26 注7 文献91頁「現業社と其下請」

27 注24 A 文献参照

28 注2 ②文献86頁「直江津線工事の起るに及び、南は直江津・関山間の
工事を担任し、坂口新田、戸草、大迫（大廻の誤植）等の隧道工事に当り」

29 注24 A 文献参照

30 きっかけは国立国会図書館の検索サイトで、「高速道路と自動車」39
巻12号に、小川徳平の碑が建っているという文を見つけたこと。

高速道路調査会に調査を依頼し、返信に添付された矢野純一氏の報文
に「長野市・善光寺の裏手に日本のトンネル工事の祖、故小川徳平の記
念碑がひっそりと建っている。上信越自動車道の建設現場で働く作業員
の多くは、正月休みを郷里で過ごしたあと、善光寺のご本尊と、この記
念碑に1年の無事故を祈ってから現場に戻る」と記されていた。

現地を確認し、善光寺事務局の許可を得て撮影させていただくことが
できた。ともども記して感謝申し上げたい。

矢野純一 一九九六「未来道の足音」『高速道路と自動車』第39巻第12
号 高速道路調査会

31 畠 純子編一九九四『南一郎平の世界』豊の国宇佐市塾

32 戸草近辺で工事が行われていたようであるが、今のところ未確認。

33 今村浅治郎（浅次郎）は横須賀線の工事（一般土工）や北海道鉄道工
事の請負人として名がみえる（注2 ②文献98、416頁）。徳永今吉も
北海道鐵道工事の請負人の中に名がみえる（注2 ②文献418頁）。

34 注2 ③文献。吉田組については請負業史「吉田組の出現」に詳しい（注
2 ②文献43〜49頁）。吉田組は明治23年4月に、豊野町浅野に19年中に
亡くなったコレラ病死者のために「希望列拉病死者供養塔」を建立して
いる（注2 ⑧文献ほか）。

35 柏原町区誌編纂委員会一九八八『柏原町区誌』410・411頁

36 三水村公民館一九五五「老人の日によせて」『さみず第43号』

37 齊藤利貞（利定）は明治一九年一月の『官員録』に「土木局第一部
長 権少書記官 兼廣嶋縣御用掛 大分 正七位南一郎平 駒込東方
町」のもと、「九等属 岡山 斎藤利貞」と記されている人物か。現業
社の有力な幹部の一人。直江津線工事の後も横川・軽井沢間の建設や北
越鐵道の建設に携わっている（注2 ②文献175、240頁）。

明治三十年一月二十一日付朝日新聞に掲載された、「齊藤利貞会葬お
れい」には、南尚（一郎平）が友人の筆頭に記載されており、関係の深
さが伺える。

38 南一郎平については、大分県教育会一九二七「南一郎平（克己）」『續
修身科郷土資料集成』、奥田 忠一九八八『南尚翁（南一郎平）』、注16
文献など参照されたい。

39 なお、同『官員録』には、土木部第二部・および第三部に後述する、
現業社理事大橋靖の名も記されている（四等属 岐阜 大橋靖）。

40 読売新聞「ヨミダス歴史館」より検索（讀賣新聞 明治19年6月8日
朝刊4頁）

41 石川 寛二〇〇四「明治前期における官吏制度の形成過程」

『広島修道大学 修道法学』27巻1号

42 現業社の創立の経緯については、注2 ②文献の「現業社の出現」でふ
れている（86・87頁）。

43 注2 ②文献91頁

44 図1は、注2 ①文献232頁「高崎・直江津間線路図」を原図とし、
一部追加したものである。